



特別編

九州の逸品

KYUSYU NO IPPIN

FILE No.45



九州の「地域ブランド」を
ご紹介致します。

熊本

ひごぞう

肥後象がん

※「肥後象がん」の名称で、国の伝統的
工芸品に指定されています。

熊本を代表する伝統工芸品・肥
後象がん。武家社会で花開いた工芸
品は、脈々と受け継がれ、装飾品や
装身具などの現在のライフスタイル
に合わせたものへと変化を遂げてい
ます。今回はその歴史を紐解くと同
時に、肥後象がん師・河口知明氏への
インタビューを通して、肥後象がん
の今を見つめます。



刀の鐔を現代風にアレンジしたループタイ
(肥後象がん師・河口知明氏作)

シルクロードを経て

◎ 日本に伝わった象がん技術

象がんは、「象眼」「象嵌」とも記します。象は「かたどる」、嵌は「はめこむ」という意味があり、「象嵌」とは一つの素材に異なる素材を嵌め込む工芸技法の総称です。その技術は数千年前にエジプト方面から起こり、中東を経てシルクロードを通り、中国に伝わったとされています。

日本には飛鳥時代、仏教伝来と共に象がん技術が広がったとされ、江戸時代には全国的に普及しました。肥後象がんが現代まで残っているのは、名工たちが肥後象がんを芸術の域にまで高め、その技術を後人が頑なに守り続けてきたからです。

約400年前、

◎ 鉄砲鍛冶から始まった

肥後象がん

肥後象がんの歴史は、約400年前、林又七という鉄砲鍛冶によって始まったと伝えられます。又七は熊本城を築城した尾張国出身の加藤清正に

仕え、天正16年（1588年）には、清正とともに肥後に入国。その後、肥後藩は徳川幕府によって改易されますが、又七はその腕を買われ、引き続き細川家に召し抱えられます。特に細川忠興（三斎）は、名匠に刀剣金具の製作にあたらせ技量の奨励をはかったため、鐔や刀装金具類の名品が数多く生まれました。

肥後金工として有名なのは、林、西垣、平田、志水の四家および幕末にでた神吉家です。林派の流れを受けた神吉派三代の楽寿は、又七以来の名人と称されました。

しかし、明治維新後の廃刀令で刀装金具の需要が激減し、象がん師の多くが転廃業に追い込まれました。その中で、幕末に創業した田辺家が懐中時計の鎖や帶留めなど、装飾品、装身具など新分野にその技を応用し、肥後象がんの技法が守られてきました。

人間国宝の米光太平氏及び県の重要無形文化財の保持者に認定された田辺恒雄氏により、後継者の養成がなされ、現在では、10数名の象がん師が活躍しています。伝統技術を保存するため昭和38年（1963年）、

「肥後象眼技術保存会」が結成され、平成15年（2003年）には「肥後象がん振興会」が伝統的工芸品の国指定を受けました。

◎ 人間国宝の元で
8年修業を積む

人間国宝に認定された肥後象がん師・米光太平氏の元で8年修業し、その技を今に伝えている人がいます。それが、熊本市内に工房を構える肥後象がん師・河口知明氏です。今回は、河口氏にお話をお伺いしました。

◎ 厳しい修業を終え
晴れて肥後象がん師に

私がこの道に入ったのは、10代の頃で、幼い頃から手先が器用だったこともあり、親の勧めで坪井町に住んでおられた米光先生の元で修業することになりました。仕事は好きでしたが、当時は弟子もたくさんいて、中には意見の合わない人もいましたので、弟子入りして3年目の時、辞めて他の仕事に就こうかと思悩みました。しかし、3年を過ぎると「この仕事を自分のものになくしては」と思うようになりました。



肥後象がん師・河口知明氏。1946年生まれ。人間国宝の肥後象がん師・米光太平氏に師事。後進育成に力を注ぐと同時に、新しいデザインの肥後象がんを模索する



左.茶道で和菓子を食べるために使われる道具・菓子切／右.バレッタ(写真)やネックレスなど装身具も多く手掛ける

職人の世界では、5年習ったら2、3年お礼奉公をするというのが慣例で、私も5年目で独立を考え、その後3年間お礼奉公しました。修業8年目で晴れて独立しましたが、独立する際に先生が肥後象がんの販売先を紹介してくださるなど、とてもよくしてくださいました。

◎ 多彩な技法と 繊細な手技

肥後象がんは手仕事の基本です。小づちやタガネといった仕事道具も全て手作りです。溶接も接着剤も施さず2つの金属を合わせるには、長年の経験と勘が頼りです。一般的なものは「布目象がん」と呼ばれる技法で、地鉄に縦横、両斜めから4回にわたって、タガネを斜めに倒して地鉄に当て、小づちで打ち、1ミリの隙間に4〜5本ほどの溝をつくります。

タガネで浅く布目のように刻まれた部分に柔らかな金や銀をのせて、鹿の角を当てて打ち込みます。嵌め込むことで、後々まで金や銀が脱落しません。

布目象がんの他にも、様々な技法があります。私が得意とするのは絵柄が立体的に表現される据紋技法(高肉に彫刻したものをはめこむ技法)です。先人は様々な技法を使っていますから、あらゆる技法を習得していないと古い鐺の修理もできません。

◎ 漆黒の地鉄が美しい 肥後象がん

肥後象がんは地鉄そのものの美しさを大切にするため、塗料等は一切使わないで錆色だけで仕上げます。錆というと赤茶色を想像される方が多いですが、肥後象がんの錆は黒色です。黒い錆は、錆止めの役目もあり、腐食しません。しかし、この黒い錆を出すのは大変根気のいる作業で、手抜きをしたらすぐに分かります。

錆出しは、まず錆出し液を塗り、湿気や乾燥に気をつけながら、良質な錆の発生を待ちます。1時間おきに状態を見て、錆の出方が丁度いいと思ったら夜中でもお茶で炊いて作品を投入します。乾かしてから油煙を混ぜた油を塗って焼く作業を4回繰り返し





左、布目象がん蜻蛉文香合。お茶席で焚くお香を入れる器／右、青海波文香合。伝統的な文様をあしらった香合



肥後象がん師・河口氏

ます。こうして、肥後象がんを象徴する地鉄の黒色は、時間と手間をかけてようやく現われ出ます。

◎後進育成に力を注ぐ

現在、注力しているのは後進の育成です。第2・4日曜は、熊本県伝統工芸館で肥後象がんを教えていて、そこから私のところへ習いに来る人もいます。若い人は作品を全否定するとやる気をなくしてしまうので、まず褒めて、その後に改善点をいうようにしています。自分の作品に満足してしまうと、そこで成長は止まってしまう。自分で悪いところが見えたら、それは成長している証拠です。

私の元で修業し、独立した肥後象がん師は現在4名いますが、若手には今までの名工たちが築いてきた肥後象がんの質を落とすような仕事はしないようにいつています。今の時代になつて肥後象がんの質が落ちたといわれたくありません。先人が築いてきた技術をこれからも後進に伝えていきたいと思っています。

◎現代に合った新デザインを提案

江戸時代に武具装飾から生まれた肥後象がんも、時代の流れと共に装身具や装飾品に変わってきました。今はネクタイピン、カフス、アクセサリー、ペーパーナイフ、茶道具など多岐にわたっています。お客様からも「名前を入れてほしい」「この写真を図案化してほしい」と注文をいただくことがあります。新しいデザイン、新しい製品を考えるのは楽しい作業です。これからも、先人たちの技術を守りながら、現代の人々のライフスタイルに合った新しい肥後象がんを提案していきたいです。

information

河口知明(雅号:光秋)

■工 房：熊本市池田4-12-9 ■電 話：096-324-3326
※工房にお越しの際は、事前にお電話をお願い致します

熊本県伝統工芸館(河口氏の作品はここで購入できます)

■住 所：熊本市中央区千葉城町3-35
■電 話：096-324-4930
■開館時間：9:00~17:00
■休 館 日：月曜(祝日の場合は翌日)、年末年始
■入 館 料：無料(2階企画・常設展示室のみ有料)
■http://kumamoto-kougeikan.jp/



1.家紋や花、文字など、金銀の模様を打ち抜く型も手作り／2.布目切り。肥後象がんの基本中の基本ともいえる技／3.毛彫りで模様に輪郭を刻んでいくとより立体的になる／4.アイディアの図案帳。幾何学模様や草花、アルファベットまで、依頼主の希望に応じてデザインする／5.小づち、タガネなど肥後象がんを使う道具は、ほとんど手作り

